

使徒の働き15章 「教会分裂の危機」

1A 教会分裂の回避 1-35

1B ユダヤ主義 1-5

2B 指導者たちの知恵ある判断 6-29

1C 恵みによる救い 6-11

2C 異邦人への愛の配慮 12-21

3C エルサレム教会からの派遣 22-29

3B 励まされるアンティオキア教会 30-35

2A 宣教者の間の不一致 36-41

本文

使徒の働き 15 章を開いてください。私たちは、14 章でパウロとバルナバが第一次宣教旅行を終えて、シリアのアンティオキアの教会に戻ってきて、宣教報告をしたところを読みました。異邦人に信仰の門を神が広く開いてくださっています。

けれども、この動きを必ずしも良いと思わない抵抗があったことを思い出してください。10 章で、ペテロ自身、コルネリウスの家に行った時に彼自身が、天からの幻に対して三度、拒みました。11 章で、異邦人と食事をしていただけだと咎めた人たちがいました。しかし、一つ一つ、主が異邦人に門を開いておられることが、明らかになってきました。そして異邦人の多くいるアンティオケは、ユダヤ地方にいる兄弟たちのため、飢饉の時に支援物資も持って行きました。こうやって、神は美しい御霊の働きで、異邦人が同じ神の救いにあずかり、ユダヤ人の兄弟に愛の行いも示し、教会によってユダヤ人と異邦人の間に和解が、一つに結ばれるという平和が造り上げられていったのです。けれども、ユダヤ人の中には、このことに強い抵抗が元々あり、異邦人への宣教が大体的に行われ、中心的存在となっていたアンティオケの教会に、「ユダヤ主義」とも呼ぶべき、恵みの福音を台無しにする教えをする者たちがやってきたのです。

1A 教会分裂の回避 1-35

1B ユダヤ主義 1-5

¹ さて、ある人々がユダヤから下って来て、兄弟たちに「モーセの慣習にしたがって割礼を受けなければ、あなたがたは救われない」と教えていた。² それで、パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じたので、パウロとバルナバ、そのほかの何人かが、この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった。³ こうして彼らは教会の人々に送り出され、フェニキアとサマリアを通過して行った。道々、異邦人の回心について詳しく伝えたので、すべての兄弟たちに大きな喜びをもたらした。⁴ エルサレムに着くと、彼らは教会の人々と使徒たちと長老たちに迎えられた。それで、神が彼らとともにいて行われたことをすべて報告した。

ここの出来事を、おそらくパウロは、ガリラヤ人への手紙 2 章で書いているのだと思います。その部分を、長くなりますが読んでみます、2 章 1-10 節です。「¹ それから十四年たって、私はバルナバと一緒に、テトスも連れて、再びエルサレムに上りました。² 私は啓示によって上ったのです。そして、私が今走っていること、また今まで走ってきたことが無駄にならないように、異邦人の間で私が伝えている福音を人々に示しました。おもだった人たちには個人的にそうしました。³ しかし、私と一緒にいたテトスでさえ、ギリシア人であったのに、割礼を強いられませんでした。⁴ 忍び込んだ偽兄弟たちがいたのに、強えられるということはありませんでした。彼らは私たちを奴隷にしようとして、キリスト・イエスにあつて私たちが持っている自由を狙って、忍び込んでいたのです。⁵ 私たちは、一時も彼らに譲歩したり屈服したりすることはありませんでした。それは、福音の真理があなたがたのもとで保たれるためでした。⁶ そして、おもだった人たちからは—彼らがどれほどの者であっても、私にとって問題ではありません。神は人を分け隔てなさいません—そのおもだった人たちは、私に対して何もつけ加えはしませんでした。⁷ それどころか、ペテロが割礼を受けている者への福音を委ねられているように、私は割礼を受けていない者への福音を委ねられていることを理解してくれました。⁸ ペテロに働きかけて、割礼を受けている者への使徒とされた方が、私にも働きかけて、異邦人への使徒としてくださったからでした。⁹ そして、私に与えられたこの恵みを認め、柱として重んじられているヤコブとケファとヨハネが、私とバルナバに、交わりのしるしとして右手を差し出しました。それは、私たちが異邦人のところに行き、彼らが割礼を受けている人々のところに行くためでした。¹⁰ ただ、私たちが貧しい人たちのことを心に留めるようにとのことでしたが、そのことなら私も大いに努めてきました。」

このように、パウロに啓示されていた恵みの福音は、エルサレムにいる指導者、ヤコブ、ペテロ、ヨハネも同じ福音を共有していて、それで交わりのしるしとして右手を差し出してもいました。異邦人に福音の戸が開かれており、続けてユダヤ人にも福音が語られなければならない、ペテロは主にユダヤ人への宣教、パウロは主に異邦人への宣教に召されているとうことも確認されています。それぞれ、異なる召しと働きがあつて、表面的には異なったことを話しているように見えていて、実は同じことを信じているということがあります。パウロのローマ人への手紙とヤコブの手紙を比べれば、反対のことを語っているように見えますが、いいえ、「信仰による義には、行いが伴う」ということにおいては、完全に一致しているのです。

ところが、エルサレムにある教会にいる者たちで、そうした指導者の意向とは異なり、ユダヤ教の伝統に固執していた人たちがアンティオキアの教会にまで来て、救われるためにはユダヤ教徒にならないといけないと教えたのです。割礼は、アブラハムへの契約の印として与えられ、男性の性器の包皮を切る儀式ですが、その子種が神の契約の子であることを示すものでした。ですから、これをまず受けなければ、契約から外れている、つまり救われていないということです。イエスを信じるだけでなく、ユダヤ教に改宗しなければいけないと教えたのです。

今日に至るまで、人間の中には「行いで努力しなければいけない」という思いがあります。だか

ら、宗教は善行を積んで神に到達することを教えます。けれども、聖書は、行いによっては義とされないことを、徹底的に明らかにしている書物です。アダムが罪を犯して裸であることがわかり、二人がいちじくの葉で覆いましたが、それでも恥が取れませんでした。神に対して犯した罪があり、その恥があつて、それを覆うために努力しても、やはり取り除かれないのです。神が、彼らのために皮による衣をあてがわれましたが、動物を屠って、血を流して、それによって恥を覆ってくださったのです。罪から来る報酬は死です。罪は血が流されないと清められない、ということです。

ところが、エバから生まれた子カインが、汗水流して育てた地上の作物を神にささげようとして、受け入れられませんでした。アベルの羊のいけにえは受け入れましたが、それに嫉妬して、怒り、落ち込み、アベルを殺しました。人は行いでは罪を清めることができないのですが、それをあきらめきれずに行いによって贖おうとするのです。モーセによって律法が与えられましたが、イスラエルの民は、それに違反して、神に背を向ける歴史を辿って行きました。それで、神は、バビロンによって彼らが捕え移される前に、エレミヤを通して新しい契約を約束されたのです。それは神ご自身が彼らの罪を赦し、御霊によって彼らの心を清め、彼らの心に律法を置くという契約です。イエス様が、ご自身の流される血がその契約の印だと言われました。

ですから、十字架こそが私たちを救う神の業であり、ここに立つときはユダヤ人も異邦人も神の前では一つであり、ゆえにキリストの体、教会は、両者が一つとなった、新しい人なのだ、パウロはエペソ 2 章で話しています。けれども、人間はこの恵みになかなか立てません。なぜなら、まだ行いで自分が向上できるんだ、改善できるんだと思ってしまうからです。恵みに立つには、自分がどこまで罪深いのか、墮落しているのか、自分に何も良いものがないのだということを知る必要があるのです。それも、自分自身で知るのではなく、神の前に出ることによって、聖霊によって示されないといけなないのです。ペテロもヨハネも、福音書の中で自分自身を含めて、とことんまで自分が罪深いことを包み隠さず、明かれています。

話を本文に戻しますと、「パウロやバルナバと彼らの間に激しい対立と論争が生じた」とあります。ここで譲歩すれば、恵みの福音の真理が台無しになります、福音と呼んでもそれはもう異質なものになり、福音ではなくなります。今は、エホバの証人など、キリストを名乗っていても、そのキリストは異なるキリスト、福音とは言っても異なる福音であります。そうなってしまうので、一步も譲ることはしませんでした。

そして、「この問題について使徒たちや長老たちと話し合うために、エルサレムに上ることになった」とありますが、これは彼らが権威だということではなく、それぞれが神から直接、啓示が与えられて、恵みの福音の真理に至ったのです。彼らがエルサレムに行くのは、第一に、彼らがエルサレムから来たのだと主張していることがあり、第二に、ここが大事なのですが、一致のためです。ユダヤ人と異邦人が、キリストにあつて一つになるという平和が、恵みの福音の大切なもう一つの側面なのです。私たちはとにかく、自分が天国に行けるために救われるということだけを福音と考え

がちですが、キリストにあって平和が地上にも造られていくということが、神の強い御心だということを感じる必要があります。

そして 3 節、「フェニキアとサマリアを通過して行った」とありますが、かつて、ユダヤ人がステパノの殉教がきっかけで逃げて行って北上した時に、サマリアではピリポが福音を語り、フェニキアでも福音を語っていたことが書かれています(11:19)。その時にはユダヤ人にしか語らなかつたとありますが、今、パウロとバルナバによって、異邦人にも福音が信じられていることを知って大きな喜びをもたらしたのです。そして 4 節、彼らはエルサレムの教会で迎え入れられています。先に話したように、彼らも異邦人への神の救いを喜んでいるのです。放蕩息子の喩えにもありましたが、神の恵みの救いは人々を喜ばせ、お祝いもさせますが、律法主義に陥っている人々には、それは怒りに値することですね。ヨナも、ニネベの救いに非常に腹を立てていました。

⁵ところが、パリサイ派の者で信者になった人たちが立ち上がり、「異邦人にも割礼を受けさせ、モーセの律法を守るように命じるべきである」と言った。

イエス様が復活してからは、パリサイ人たちがかえって、イエスが約束のメシアではないか？と信じるようになっていったという話をすることがありますね。サンヘドリンで、使徒たちの処罰をどうすべきか議論していた時に、ガマリエルが立って、彼らを放っておきなさいと助言したのを思い出してください。ガマリエルはパリサイ派です。彼も、もしかしたら神から来ているかもしれない。もしそうなら、神の働きを妨げることになるという、疑いの余地を残していたのです。というのは、パリサイ人たちは、死者の復活を堅く信じていたからでした。そして、イエスが死者の中から甦ったのですから、この方がキリストではないかと思って信じたのです。けれども、その他のことについては依然としてパリサイ派の考えを持っていました。

2B 指導者たちの知恵ある判断 6-29

1C 恵みによる救い 6-11

⁶そこで使徒たちと長老たちは、この問題について協議するために集まった。^{7a}多くの論争があった後、ペテロが立って彼らに言った。

十分な議論をし尽くしたということでしょう。ペテロは、初めから結論ありきせず、忍耐して、彼らが意見を出し切るのを待っていたのでしょう。そして彼らの言い分も聞けたので良かったでしょう。

^{7b}「兄弟たち。ご存じのとおり、神は以前にあなたがたの中から私をお選びになり、異邦人が私の口から福音のことばを聞いて信じるようにされました。⁸そして、人の心をご存じである神は、私たちに与えられたのと同じように、異邦人にも聖霊を与えて、彼らのために証しをされました。⁹私たちと彼らの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。

ユダヤにいる一部の人々にとって、異邦人への救いはアンティオキアのほうで勝手に、一線を越えて行っている歪んだものだったのでしょうか。けれども、ペテロは、「私こそが、神に選ばれて、異邦人の福音の戸が開かれていることを目撃した証人です。」と言っています。特にペテロは、イエス様に名指して、天の御国の鍵を与えと言われていた人でした。ですから、この啓示は、パウロやバルナバが作り出した新しいものではなく、エルサレムにおいても神からのものと認めていたものなのです。

ペテロはここで強調しているのは、「人の心をご存じである神」そして「彼らの心を信仰によってきよめてくださった」ということです。新しい契約の特徴は、律法が石の板ではなく心の板に書き記されることです。キリストの血によって、良心が清められます。御霊によって、心が一新します。律法を守ると言う外側の行いではなく、みことばを、信仰を持って聞き、それに素直に応答する、心の清めなのです。そこにおいては、ユダヤ人も異邦人も差別はありません。

¹⁰ そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか。¹¹ 私たちは、主イエスの恵みによって救われると信じていますが、あの人たちも同じなのです。」

律法のことを、ペテロは「くびき」と呼んでいます。これは当時のユダヤ人も使っていた言葉でした。畑を耕す時に、牛の肩に載せるものですね。それを負いきれなかつたのは、イスラエルの歴史が物語っており、また福音書を見れば、パリサイ人たちがいかに守れていないかを、イエス様が明らかにされた通りです。

アメリカで、メシアニックと呼ばれる、ユダヤ人信者の人々の集まる礼拝に何度か参加したことがあります。その牧師さんが面白いことを仰っていました。「我々ユダヤ人は、いかに食物規定を守っていないかよく知っている。中華料理好きでしょう？」アメリカで中華料理店は定番になっていますが、豚肉が出てくるは、彼らの定めるコーシャに違反していること満載ですが、好んで食べているのです。なのに、ユダヤ人であることを意識すると、途端にコーシャを守らなければいけないと思ってしまう。その二重基準を説教しておられました。

けれども、私たちも同じではないでしょうか？ 律法主義に陥っている人であればあるほど、実は自分自身が律法を守られていない。だからなおのこと強迫観念のように強調している、と言えるかもしれません。中途半端だからこそ律法を強調できて、他人に強要し、守っていない人を裁くのです。(I テモテ 1:8-11 参照)けれども、パウロは、律法の髓まで知っているからこそ、人は律法の行いではなく、信仰によってのみ義とされるのだと教えることができました。

ところで、イエス様も「くびき」という言葉を使われましたね。主に従うこと、主から聞いて学ぶことについて、「わたしのくびきは軽い」と言われました。私たちも新しい契約の中で生きるにあたって、

神の命令を守るのです。けれども、それはもう重荷とはなりません。心が新たにされて、愛の関係の中に入り、まず、愛されたから、応答として戒めを守るという動機に代わったのです。ヨハネは、「Iヨハ5:3 神の命令は重荷とはなりません。」と言いました。ですから、重荷になっていると感じた時は、一度、その頸木が確かにイエスからのものなのかどうかを確かめる必要がありますね。

2C 異邦人への愛の配慮 12-21

¹²すると、全会衆は静かになった。そして、バルナバとパウロが、神が彼らを通して異邦人の間で行われたしるしと不思議について話すのに、耳を傾けた。

パウロとバルナバが、神が行われたことを語っていた時に、パリサイ派であった信者が立ち上がって遮りました。そして議論になったのですが、ペテロが立ち上がって全会衆が静まりました。それで二人は続きを語る事ができました。ユダヤ人たちは、ユダヤ人たちの間だけで起こっていたと思われていたことが、このように異邦人の間でも起こっていたのです。聖霊のパプテスマを受けること。それから、しるしと不思議が異邦人の間でも行われたことです。

¹³二人が話し終わると、ヤコブが応じて言った。「兄弟たち、私の言うことを聞いてください。¹⁴神が初めに、どのように異邦人を顧みて、彼らの中から御名のために民をお召しになったかについては、シメオンが説明しました。

ヤコブは、聖書の中で同名の人が何人も出てきますが、ここではイエス様の半兄弟であるヤコブのことです。彼は血縁の兄弟であったものの、その時は信じていませんでした。イエス様の復活を目撃してから信仰を持ちました。ステパノの殉教の後、人々が散っていき、福音宣教が広がっていききました。ペテロなども、巡回の旅に出かけました。それでエルサレムの教会の監督が、ヤコブに任されていたのです。彼は教会の伝承では、「義人ヤコブ」と呼ばれていました。人々から非常に尊敬されていたそうです。彼がペテロの話に応じて話しました。「シメオンが説明しました」と言っていますが、ペテロのアラム語名です。ヘブル語はシモンですね。とても親しみを込めた呼び名で、ペテロがユダヤ人であることを強調しています。

¹⁵預言者たちのことばもこれと一致していて、次のように書かれています。¹⁶『その後、わたしは倒れているダビデの仮庵を再び建て直す。その廃墟を建て直し、それを堅く立てる。¹⁷それは、人々のうちの残りの者と わたしの名で呼ばれるすべての異邦人が、主を求めるようになるためだ。¹⁸—昔から知らされていたこと、 それを行う主のことば。』

これは、アモス書からの引用です。ダビデの仮庵を立て直すとは、イスラエルを立て直し、回復させるということです。ここで興味深いのは、ダビデの家と言わずに、仮庵と言っていることです。これは、ダビデの時には神の建物、神殿がありませんでした。契約の箱は、以前は至聖所の中にあり、大祭司が年に一度、いけにえの血を通して近づいたのです。けれども、ダビデの時には天

幕があり、そこにそのまま契約の箱があったのです。すべての人が神に近づくことができる恵みを、予め示していた象徴的な姿です。後に、キリストが十字架にかけられ死なれる時に、神殿が上から下に垂れ幕が真っ二つに裂けましたが、その時に、神の御座にキリストの流された血によって、そのまま真っ直ぐに近づくことができるようにされました。

そして、アモス書だけでなく、預言書の数多い箇所、イスラエルの残りの民だけでなく、異邦人も主の知識にあずかるようになることを教えています。ペテロがコルネリウス一家の救いを目撃しただけでなく、これは聖書そのものに立脚した啓示なのだということです。

¹⁹ ですから、私の判断では、異邦人の間で神に立ち返る者たちを悩ませてはいけません。

ここがヤコブの強調したかったことです。神に立ち返る者たちを悩ませることです。ユダヤ主義者らが行ったことは、教会を混乱させ、分裂させ、人々に傷と悩みを残していくだけになります。教えている本人たちは正しいことを教えていると思っていたでしょうが、人間の正しさが神の義に代わるものではなく、むしろその正しさこそが、神の前では「不潔の衣」であると、イザヤは預言で明らかにしています(64:6)。教会の中に、かき乱す者たちが出て来ることが、何度となく使徒たちの手紙に書かれています。例えば、ローマ人への手紙 16 章にこうあります。「16:17-18 兄弟たち、私はあなたがたに勧めます。あなたがたの学んだ教えに背いて、分裂とつまずきをもたらす者たちを警戒しなさい。彼らから遠ざかりなさい。そのような者たちは、私たちの主キリストではなく、自分の欲望に仕えているのです。彼らは、滑らかなことば、へつらいのことばをもって純朴な人たちの心をだましています。」

²⁰ ただ、偶像に供えて汚れたものと、淫らな行いと、絞め殺したものと、血とを避けるように、彼らに書き送るべきです。²¹ モーセの律法は、昔から町ごとに宣べ伝える者たちがいて、安息日ごとに諸会堂で読まれているからです。」

ヤコブは、ユダヤ人信者に仕えている指導者です。パウロたちは異邦人に仕える指導者でしたが、心は同じでした。それは、「兄弟に対する愛の配慮」です。ヤコブは、異邦人を悩ましてはいけないと思い、パウロは、ユダヤ人に対して異邦人信者が愛していることを、慈善行為によって示すことに気を遣っていました。ヤコブが提案したことは、「ユダヤ人信者が、異邦人信者と交わる時につまずきにならないように。」という配慮です。

異邦人社会では当たり前に行われていたことでも、ユダヤ人には耐えられないものがありました。それがここに書かれていることです。市場で売られている肉は、まず偶像に供えられてから売られています。それで良心を痛める兄弟がいるということです。パウロも、ローマ 14 章で取り組んでいます。淫らな行いについては、ギリシア・ローマ社会では当たり前に行われていた忌まわしい行いではありますが、異邦人とてキリスト者であれば避けなければいけません。パウロの手紙にも、それ

は何度となく、強く警戒し、避けなければいけないと教えています。絞め殺したものは、血が含まれているので、「血を食べてはならない」という戒めに反します(レビ 17:13)。そして血を避けるとありますが、こういったものが食事の席に出てきたら、ユダヤ人の兄弟は傷ついてしまいます。

つまり、福音の本質的な部分ではなく、実際的な交わりの場面で愛し、尊敬する態度を互いに持つために、基本的なところを抑えてください、という勧めです。モーセの律法が各地で読まれていて、異邦人であっても、ユダヤ人はこれらのものは避けているのだと言うことを知っているのだから、相手を尊重するための配慮として負担にならないということでもあります。

こうしてヤコブは、知恵の言葉を語りました。知恵の言葉とは、相対する人々の間に平和をもたらすことのできるような知恵のことです。彼自身や手紙の中でこう語っています。「ヤコブ 3:17 しかし、上からの知恵は、まず第一に清いものです。それから、平和で、優しく、協調性があり、あわれみと良い実に満ち、偏見がなく、偽善もありません。」ユダヤ人と異邦人の間にある亀裂を、この決定によって避けることができます。両者が満足することができます。

3C エルサレム教会からの派遣 22-29

²² そこで、使徒たちと長老たちは、全教会とともに、自分たちの中から人を選んで、パウロとバルナバと一緒にアンティオキアに送ることに決めた。選ばれたのはバルサバと呼ばれるユダとシラスで、兄弟たちの間で指導的な人であった。

当時、文書だけではその真正は認められませんでした。申命記にある、二人、三人の証人がいて事実と認められると言う律法に基づき、文書を持って行く人々に、エルサレムで指導的な働きをしている、ユダとシラスが選ばれます。「バルサバと呼ばれるユダ」とありますが、バルサバは「安息日の子」という意味です。2章23節で、イスカリオテのユダに代わる使徒を選ぶ時に、二人を選びましたが、マツティアの他に、「バルサバと呼ばれ、別名をユストというヨセフ」とあります。もしかしたら兄弟かもしれませんね。いずれにしても、彼はヘブル語を話すユダヤ人、ヘブライストのユダヤ人です。ギリシアの影響を受けていない伝統的なグループのユダヤ人です。そして、「シラス」ですが、彼にはラテン語名があって、手紙の中では「シルワノ」と出ています。使徒16章37節には、パウロと共にローマ市民であることも分かります。つまり、彼はギリシア語を話すユダヤ人、ヘレニストのユダヤ人です。以前、二者の対立が起こって、使徒たちが七人のヘレニストのユダヤ人を食卓に仕える者として選んだのを思い出してください。エルサレムから、この二人を代表として送るのは、ユダヤ人とギリシア人がキリストの平和で結ばれていることを示しています。

²³ 彼らはこの人たちに託して、こう書き送った。「兄弟である使徒たちと長老たちは、アンティオキア、シリア、キリキアにいる異邦人の兄弟たちに、あいさつを送ります。²⁴ 私たちは何も指示していないのに、私たちの中のある者たちが出て行って、いろいろなことを言ってあなたがたを混乱させ、あなたがたの心を動揺させたと聞きました。

アンティオキアだけでなく、シリア地方、キリキア地方にも教会が建てられていました。ルカはパウロとバルナバの宣教旅行だけを書き記していますが、その他にもアンティオキアや、パウロの故郷タルソのあるキリキア地方にも広範囲に、異邦人信者が興されていたということです。

そして、モーセの慣習を守らないと救われれないと言った者たちは、エルサレムから来たのは事実だけれども、彼らの指示なしで勝手にやってきたことを明確に伝えています。教会の指導者たちの間では、麗しい一致があったのですが、エルサレムの権威を振りかざして勝手に動いていた者たちだった、ということです。パウロの手紙、特にガラテヤ人の手紙には、そうした、エルサレムの権威を振りかざして教えていた、偽教師たちがいたことが詳しく書かれています。

²⁵ そこで私たちは人を選び、私たちの愛するバルナバとパウロと一緒に、あなたがたのところに送ることを、全会一致で決めました。²⁶ 私たちの主イエス・キリストの名のために、いのちを献げている、バルナバとパウロと一緒にです。²⁷ こういうわけで、私たちはユダとシラスを遣わします。彼らは口頭で同じことを伝えるでしょう。

ヤコブたちの、バルナバとパウロの推薦です。彼らを愛する人々として書き記しています。愛と尊敬による結びつきです。全会一致だったということも書き忘れていません。それから、彼らを「いのちを献げている」と言っています。彼らの働きは、ただ福音を語ってそれで終わりではありませんでした。自分に死に、いのちを献げるという決意の中で行っていました。だから、だれも彼らの正統性を疑ってはならない、神の僕であることを疑ってはならないと言う念押しです。

²⁸ 聖霊と私たちは、次の必要なことのほかには、あなたがたに、それ以上のどんな重荷も負わせないことを決めました。²⁹ すなわち、偶像に供えたものと、血と、絞め殺したものと、淫らな行いを避けることです。これらを避けていれば、それで結構です。祝福を祈ります。」

ここで大事なのは、ヤコブが決定したのではなく、「私たち」ということ。使徒たちと長老たちの一致した思いであったこと。そして、何よりも、「聖霊」が導かれて決めたことなのだという事です。一人一人が聖霊に導かれて、それで一致していたということです。ルカは使徒の働きで、一貫して、それが聖霊の働きであることを伝えています。教会が、議論をして大事なことを決定する時に、聖霊の導きと決定の中で行っているのだと言うことを知る必要があります。

3B 励まされるアンティオキア教会 30-35

³⁰ さて、一行は送り出されてアンティオキアに下り、教会の会衆を集めて手紙を手渡した。³¹ 人々はそれを読んで、その励ましのことばに喜んだ。

アンティオキアの人々は励まされました。そして喜んでいます。喜んだという言葉が、この章だけで二回出てきました。パウロとバルナバの一行がエルサレムに上る途中、フェニキアとサマリアに

いた人々が、異邦人の回心について詳しく伝えたら、「5:3 大きな喜びをもたらした」とあります。そして、ここでも手紙の内容を知って、喜んでいます。イエス様がこのことを弟子たちに明確に語っておられましたね。「ヨハ 15:11 わたしの喜びがあなたがたのうちにあり、あなたがたが喜びで満ちあふれるようになるために、わたしはこれらのことをあなたがたに話しました。」

³² ユダもシラスも預言者であったので、多くのことばをもって兄弟たちを励まし、力づけた。

これまで、使徒という職が与えられた人たちを見ました。教会には治める働きとして長老も出てきましたね。長老は、牧者の働きをする人たちでもあります。それから、食卓に仕える人々として執事も出てきました。さらに、ピリポのような伝道者もいました。そして、11章の最後のところに、アンティオキアにエルサレムから、預言者たちが下ってきたという言葉があります。その中の一人、アガポは飢饉が世界中に来ることを前もって伝えました。ここでも、預言者が出てきます。ユダとシラスが、その働きをしています。預言は、必ずしも将来のことを告げるだけでなく、コリント第一 14章によれば、「14:3 預言する人は、人を育てることばや勧めや慰めを、人に向かって話します。」とあるように、信仰的な励ましの言葉を神から与えられて語るのも預言です。教会には、「エペ 4:11 こうして、キリストご自身が、ある人たちを使徒、ある人たちを預言者、ある人たちを伝道者、ある人たちを牧師また教師としてお立てになりました。」とあります。聖書が与えられている今、使徒と預言者という教会の土台は据えられました。ですから、使徒たちのような権威、預言者のような権威の与られている人たちは、今はいません。今の私たちにとっては、聖書が使徒たちの教えです。けれども、まだ福音が語られていないところに遣わされ開拓の働きをするという使徒的な働きや、人々を慰め励ます預言の賜物は今でも続いています。

³³ 二人は、しばらく滞在した後、兄弟たちの平安のあいさつに送られて、自分たちを遣わした人々のところに帰って行った。

ユダとシラスは帰りましたが、シラスはその後すぐにアンティオキアに戻ってきます。36節以降に書いてあります。

³⁵ パウロとバルナバはアンティオキアにとどまって、ほかの多くの人々とともに、主のことばを教え、福音を宣べ伝えた。

アンティオキアがますます、教えと宣教に豊かなところとされたようです。パウロとバルナバだけでなく、多くの人たちが教えと宣べ伝える働きに従事しています。教えるのは、教会を建て上げることです。信仰が養われ、育てられるための働きです。宣べ伝えることは、福音を宣言することです。まだ主を知らない人々に主に語られるものですが、信じている者たちにももちろん語られます。

2A 宣教者の間の不一致 36-41

³⁶ それから数日後、パウロはバルナバに言った。「さあ、先に主のことばを宣べ伝えたすべての町で、兄弟たちがどうしているか、また行って見て来ようではありませんか。」

前回、私たちは、パウロとバルナバが第一次宣教旅行をした後半部分を見ました。ピシディアのアンティオキアから、イコニオンに、そしてリステラとデルベに行き、その後、再びリステラ、イコニオン、アンティオキアに戻りました。それは、信じた者たちがその恵みの中に留まるように励ますためです。信じるための伝道は大切な働きですが、信じた者たちへの励ましの働きは同じように大事です。そして、短い期間の間に、長老たちを選んで、主にお任せしました。パウロは、そうした宣べ伝えた町々で、兄弟たちがどうなっているのか見に行きたい、そして信仰を建て上げるお手伝いをしたいと願いました。バルナバも同意します。

ところが、恵みの福音の真理において、共に戦い、共に行動したこの二人が、なんと意見が分かれて別行動を取ってしまうのです！次をご覧ください。

³⁷ バルナバは、マルコと呼ばれるヨハネと一緒に連れて行くつもりであった。³⁸ しかしパウロは、パンフィリアで一行から離れて働きに同行しなかった者は、連れて行かないほうがよいと考えた。³⁹ こうして激しい議論になり、その結果、互いに別行動をとることになった。バルナバはマルコを連れて、船でキプロスに渡って行き、⁴⁰ パウロはシラスを選び、兄弟たちから主の恵みにゆだねられて出発した。

私たちは、神に用いられている器をどこか、人間を超えてしまっている人のようにみなしてしまいます。彼らは私とは違う、と心のどこかで言って区別しているのです。けれども、この生々しい物別れは、まさにパウロとバルナバが私たちと同じ感情を持っている人間であり、神が彼らを恵みによってお立てになり、用いておられるということを表しています。

マルコの話は、第一次宣教旅行で、キプロスを離れ小アジアへ渡り、パンフィリア地方のペルガに行く前に、エルサレムに帰ってしまったことを、私たちは以前見ました。パウロは、そのような経緯があるので、過去の宣教の働きになることは前回の苦難を思えば十分にあり得ることで、マルコは連れて行かないと判断しました。妥当な意見です。けれども、バルナバは違いました。そういう失敗をした彼だけれども、彼は成長しただろう、またそのような機会を再度与えて、成長する機会を与えないといけないと考えたかもしれません。バルナバは「慰めの子」という名のごとく、慰めの働きを数多く行ってきました。パウロ自身がその働きの恩恵を受けました。回心したパウロをエルサレムの兄弟たちの前で擁護したり、アンティオキアで生まれた教会のために、はるばるタルソまで来て彼を連れてきたのです。また、バルナバにとってマルコは従兄弟です(コロ 4:10)。

ですから、どちらも正しいのです。ところが、そこで厳しい宣教の経験で訓練された二人だけに、

真剣になると譲れないところで激しい議論になりました。こういうことは現実の宣教の働きで、時々、いやしばしば起こります。宣教の働きに真剣であるがゆえに、それぞれ同じ物事、同じ人物を見る時に複数の視点が生まれた時に、折り合いがつかなくなることがあります。例えば、イギリスの福音派の教会で、ジョン・ストットという説教者と、ロイド・ジョンズという説教者がいました。どちらも主に用いられた優れた器ですが、ある時に意見が合わず別れてしまいました。

先ほど、教会の分裂を食い止められたのに、肝心の二人がマルコのこと別れてしまったのは、至極皮肉です。けれども、神はそのような悲劇もお用いになります。バルナバはマルコを連れて、キプロスに船出しました。キプロスはバルナバの出身地であり、マルコも親戚ですからそこが出身地でしょう。宣教旅行として、小アジアよりは過酷ではないかもしれません。そして、パウロは、先のエルサレムから来た指導者シラスを連れて行くのです。これで宣教の働きがある意味で倍増したのです。どちらも主を愛する兄弟です、このような残念なことが起こったけれども、主の命令に従う中で、神は宣教の働きを二手に分けて広げておかれたと考えてよいでしょう。

それから、パウロとバルナバは宣教では別行動を取りましたが、人間関係を切ったわけではありません。コリント第一 9 章 5-6 節には、パウロはバルナバと自分を並べて、使徒であることを言及している箇所があります。そして、マルコについてですが、自分が死刑判決を受けるのをローマの牢獄で待っている時に、こう書いています。「Ⅱテモ 4:11 ルカだけが私とともにいます。マルコを伴って、一緒に来てください。彼は私の務めのために役に立つからです。」役に立つ、と言っていますね。ここの時点では役に立たないと思っていたんですが、マルコに対する信頼を再び抱いたということになります。こうやって神は関係を修復してくださいました。

⁴¹そしてシリアおよびキリキアを通り、諸教会をカづけた。

エルサレムに戻ったシラスですが、パウロに呼ばれて第二次宣教旅行に同行します。先に話しましたように、彼はギリシア語を話すユダヤ人であり、パウロと同じです。また、ローマ市民権も持っています。これがこれからの宣教旅行で危険な目に遭った時に役立ちます。彼の働きは多大なものでした。パウロの手紙に、ラテン語名の「シルワノ」で何度となく、同労者として名をあげています。また、ペテロが第一の手紙を書いた時に、シラスに口述を頼んだことが 5 章 12 節に書いてあります。ペテロは、「忠実な兄弟として私が信頼しているシルワノによって」と、彼のことを評価しています。

アンティオキアがシリア地方にありますが、そこからキリキアに行きました。私たち夫婦は、トルコ旅行でアンティオキアからタルソへ、そしてガラテヤ地方にあるカツパドキアに行きましたが、険しい山脈が始まります。キリキア狭門という狭い山道も行きました。そこを通過して、16 章にあるデルベに向かいました。次回、そこでパウロの信仰の息子となっていくテモテが同行し、それから小アジアから出て、ヨーロッパへの宣教が始まる幻を見、そこで著者のルカが同行することになります。